

舞踊教育の夜明け

上野 浩道・輿水はる海
名須川知子・松本千代栄（司会）

本シンポジウムは松本千代栄氏の司会で、まず、各パネリストが「夜明けをどのようにおさえているのか」を話すことからはじめられ、ついでフロアとの質疑応答、最後に各パネリストにまよめの一語をという経過で進められた。

1. 「夜明けをどのようにおさえているか」

伊沢修二の貢献が大きく、舞踊は歌と共に夜明けを迎えたと言えるのではないかと（名須川）。型にはまった動きだったとはいってもやはり鹿鳴館だと考える。また、体操の限界と舞踊の面白さを感じて舞踊へと傾倒した坪井玄道と、「方舞」に舞踊の夜明けを見ることが出来る（輿水）。日本の芸道には「型に入って、型を出す」という考えがあったので、美術教育においても“臨画”を基本訓練として充分やって初めて個性がでるという考え方があったのだが、そこからは子どもの感情、感動、表現、などは出てこない。このように感情教育が脱落しては芸術教育とは言えない。従って、“臨画”から“自由画教育”へと転換したその時を美術教育の夜明けとみるのが一般的な通念である（上野）。臨画に相当するダンス教材（既成作品）には、リズムやメロディにのって踊る快さはあるが、自分で表現するという域には達していない、即ち、ダンス教材には、身体レベルでの快さはあるが、積極的な意味での自己表現には至っていないと思われる（司会）。

2. フロアとの質疑応答

(1) 「芸術と教育の関係からみた真の夜明けとは何か」という質問（新潟大学：福原）に対し、大正期の白樺派の教師は、例えば子供達を美術館に連れて行くなど芸術的価値をそのまま与えていたが、芸術教育ではそうではなくて、子供の興味や発達に応じて芸術的価値をプログラム化しなければならない。芸術を教育に当てはめるのではなく、教育が芸術を翻訳しなければならない。従って、芸術的価値の翻訳が芸術教育にとって不可欠であるという意味の答えがあった（上野）。明治の唱歌遊戯は教訓的であり、かつ軍国主義的色彩をもつと言われ、このことは一面是認できるが、他方に異なった見方もできる。即ち、歌詞ーメロディーー動きが一体になったのが唱歌

遊戯である。「歌詞は忘れても、動きとメロディは長く把握されている」という私達の体験を1つの観点とすると、明治期の唱歌遊戯も別の見方ができるのではないかと、例えば、ダンス教材であった戦事舞踊（海ゆかば、くろがねの力等）も、深刻に歌詞の内容にとらわれるのではなく、もっと動きとメロディが結び付いているとみると、国家主義という視点からではなく、ダンスを促えられるのではないかという意見（司会）に対し、教育史を振り返ると、文字化された部分しか歴史に残らなかったと言えるがこのことが問題（上野）という発言があった。

(2) 「舞踊教育にとって、意味性、情緒性が明治期に形成され、バレエのような原理がないことが問題なのではないか」という意見（筑波大学：若松）に対し、問題点を見れば、情緒性の問題は明治期に由来するのか、民族の持つものなのかという点もあり、また文化の伝統的背景において西洋化した点にもある（司会）という発言と、日本民族は感覚的に優れている。このことも手伝って、明治以来、情操教育であった。芸術を情操教育として捉えている限り、真の芸術教育は成立し得ない（上野）という発言があった。

(3) 「舞踊教育の夜明けは2回あったのではないかと。①明治期一踊って楽しむ、②S22年一内面的な自己を表現する」という意見（宮崎女子短大：中間）に対し、教育には①教える事（社会へ適応させる）と②開発する（個をdevelopさせる）という二面があり、時代によって重点の置き方が異なるのだが、民主主義の教育の原理は、個々の持ち味を伸ばすことに根底があるという答え（上野）と、その意味では舞踊教育の夜明けは第二次大戦後ということになりますね（司会）という発言があった。

3. 各シンポジストからのまよめの一語

一人一人の生命体を尊重することにより、子供達の表現をみる事が出来るのではないかと（名須川）。舞踊教育の夜明けに大きな役割を果たしたものとして運動会を、明治期の夜明けをつくった一人として二階堂トクヨをあげたい（輿水）。シ

ンポジウムを通して、身体で表現するということはコミュニケーションのみならず芸術教科として大切であることを再認識した。そして前述のように、これまで、文字化されないダンスや遊技に対する認識が抜けていたが、今後はこのような文字化されてこなかった文化に目を向ける必要がある（上野）。

以上のまとめを受けて司会者は「多くの歴史を歩いた人々によって拓かれてきた分野であるが、“体操の中の遊戯の価値”という観点からみられていたダンスというところから、今回は“舞踊の価値”というように視野を広げてみることができたと考えられる。ありがとうございました」と総括した。

以上の概略を通して、参加者は従来とは異なったより広い視点で舞踊教育を考える機会になると、このシンポジウムの価値を感じた。

（文責・柴 真理子）

*1990年度春季第29回舞踊学会
『舞踊學』13-2号より転載